

日本の朝鮮学校児童・生徒たちの発話にみられるコード・スイッチングについて

李 在鎬(東京大学大学院生)

1. はじめに

本稿では、日本の朝鮮学校に在学している児童・生徒たちの発話にみられるコード・スイッチングの特徴について述べる。

朝鮮学校の児童・生徒たちの大多数は、日本で生まれ育った、いわゆる在日コリアン(オールドカマー)である。彼らは、就学時までは日本語で日常生活をしているが、朝鮮語でのイメージ教育を実施する朝鮮学校に入学してから、朝鮮語能力を身につけ、学校内では朝鮮語を話すように、と指導を受ける。

しかし、そのような彼らは、同様に両言語を知る学生同士の間では、学校コンテキストにおいて、朝鮮語での会話がなされるような場面でも日本語の使用がみられることがある。以下は、発表者が収集したデータの一部の例である。朝鮮語の部分は、イェール式ローマ字で示している。

- (1) えー, もう ike 乾いたよ.
「えー, もうこれ乾いたよ。」
- (2) おまえさ, これ issunikka さ, ちょっと食べる.
「おまえさ, これあるんだからさ, ちょっと食べる。」
- (3) ikesun masissta よ.
「これは美味しいよ。」

上記の(1)–(3)は、いわゆるコード・スイッチング(以下、CS)の例である。(1)と(2)は、いずれも朝鮮語の単語・表現が日本語文の文中に挿入されたタイプのもので、(1)は代名詞「ike」、(2)は存在詞と理由・原因などを表す語尾が接続した形式「issunikka」が挿入されている。そして、(3)は朝鮮語文の文末に日本語の終助詞「よ」が接続している。以上の(1)–(3)は、日本語と朝鮮語の言語接触によるものである。

これまで、実際の発話データを基に、朝鮮学校出身者の二言語使用、特にCSを分析した研究は、管見の限り、見当たらないが、一部の文献に朝鮮学校出身者の朝鮮語使用において文末に日本語の終助詞「ね」「よ」などが接続することがしばしばあるという報告がある(朴浩烈2007, 伊藤英人1989)。

その他に、朝鮮学校出身者の場合ではないが、同じように日朝バイリンガルのCSを分析したものとして、朴良順(2006)、吉田さち(2005)などでは、日本語/朝鮮語(韓国語)の文法要素(名詞、形容詞など)に hata¹/するが接続するタイプが頻繁にあらわれると述べられている。

本稿では、朝鮮学校の児童・生徒たちの発話にみられるCSの特徴を確認しながら、他の日朝バイリンガルによるCSの特徴とどのような点において共通点・相違点があるのかについても述べていく。

2. データ収集

2.1 インフォーマント

本稿で扱うCSのデータは、関東所在のA朝鮮初中級学校(以下、A学校)の児童・生徒たちの発話を収集し、それより抽出したものである。

A学校は、初級学校(小学校)と中級学校(中学校)が共に設置してある学校(小中一貫校相当)で、初級と中級の人数を合わせると、全校生数は、年によって変動はあるが、おおよそ50名弱である。児童・生徒は、他の朝鮮学校の場合と同様、日本で生まれ育った日本語母語話者の在日コリアン(3世以降)であり、全員初級1年の入学時からA学校に通学している。

¹ 朝鮮語の「hata」は、日本語の動詞「する」に相当するものであり、主に名詞に接続して動詞としての働きもするが、状態を表す名詞に接続すると形容詞としての働きもする。

調査者(発表者)は、A 学校を 2010 年から現在に至るまで定期的・不定期に訪れ、調査・研究(参与観察など)を行ってきたが、今回のデータは、初級高学年(小4以降)から中級(中3)の児童・生徒(約 15 名程度)による発話データを対象としている。

2.2 発話データ

今回の発話データは、学校のキャンプやコミュニティ行事など学校関連の活動中に収集された計 224 分のものである。

<表 1> 発話データ

調査時期	時間	活動内容	備考
2013 年 7 月	45 分	(学校キャンプ) 釣り	教員も近くにいる。
2013 年 7 月	35 分	(学校キャンプ) ゲーム (ウノ)	男子学生のみ。 自由時間中の発話。
2013 年 7 月	15 分	(学校キャンプ) 全体集合	教員も近くにいる。
2015 年 2 月	5 分	(コミュニティ行事) ゲーム (アクション)	男子学生のみ。 卒業生 1 名(高 1)も参加。
2015 年 7 月	40 分	(学校キャンプ) YouTube 動画鑑賞中	男子学生のみ。
2017 年 7 月	11 分	(学校キャンプ) 朝食中	グループ別食事中。
2017 年 7 月	37 分	(学校キャンプ) 昼食中	グループ別食事中。
2017 年 7 月	36 分	(学校キャンプ) ゲーム (アクション)	男子学生のみ。

調査では、A 学校の通常の授業や部活、授業間の休み時間にもインフォーマントの発話を採録したが、授業中の発話は、教員の質問に対する回答や、おうむ返しのような発話が多く、ほとんどが朝鮮語での発話であった。今回はこのような授業中などの発話は対象外とした。また、自発的発話が多く見られるような休み時間に学生同士の間で二言語の使用が見られることもあったが、録音状態がよくないなどの理由により、今回は分析対象から除外することにした。

3. CS の分析結果

3.1 CS のタイプ：開始部言語と終了部言語

インフォーマントの発話で CS がみられた文(以下、CS 文)を抽出した結果、CS 文の数は計 158 文であった。そして、CS 文における言語交替をタイプ別にわけてみると、CS 文によっては文中に名詞などが挿入されたタイプ(insertional CS)もみられれば、文中に交替が起こって開始部と終了部の言語が異なるタイプ(alternational CS)、さらに、挿入、または交替が複数回起きているようなタイプもみられることがわかった。CS 文を各言語が現れた順に示すと以下のとおりである。

<表 2> CS タイプ (開始部言語整列)

日本語開始文		朝鮮語開始文	
言語交替順	数	言語交替順	数
J-K	81	K-J	18
J-K-J	8	K-J-K	35
J-K-J-K	7	K-J-K-J	2
J-K-J-K-J	2	K-J-K-J-K	5
計	98	計	60

<表3> CS タイプ (終了部言語整列)

日本語終了文		朝鮮語終了文	
言語交替順	数	言語交替順	数
K-J	18	J-K	81
J-K-J	8	K-J-K	35
K-J-K-J	2	J-K-J-K	7
J-K-J-K-J	2	K-J-K-J-K	5
計	30	計	128

以上の表では、CS 文の文内における言語交替を開始部(表 2)と終了部(表 3)の言語を基準として分けているが、<表 2>の開始部言語に注目してみると、朝鮮語(60 文)より日本語(98 文)で始まる文が比較的多い反面、<表 3>の終了部言語の場合は、日本語(30 文)より朝鮮語(128 文)で終わる文が圧倒的に多いことがわかる。校内でなされた発話ではないものの、学校関連の行事で収集された発話であったため、学校(コンテキスト)では朝鮮語を使わなければならないという意識から CS への影響が及ぼされた可能性がある。

3.2 hata 形 CS

先行研究では、朝鮮語/日本語の名詞などの文法要素と、する/hata が接続するタイプ(以下、hata 形 CS)もみられることが報告されていたが、今回のデータでもそのような例がみられた。

全体 CS のうち、hata 形 CS がみられたのは 36 件であるが、そのうち、朝鮮語の名詞などに「する」や「するの活用形」が接続した例は、今回のデータではみられなかった。つまり、今回の hata 形 CS はすべて日本語の文法要素に「hata」や「hata の活用形」が接続した例のみであったということである。

- (4) みならい hala.
「みならいしろ (見習え).」
(5) inom 低下 hayyo?
「こいつ、低下しますか.」

また、以上の(4)と(5)のような「日本語名詞+hata」の例(19 件)のほかにも、「日本語副詞+hata」(11 件)、「日本語代名詞+hata」(2 件)などもみられた。

3.3 日本語終助詞の接続

データでは、朴浩烈(2007)や伊藤英人(1989)でもみられる日本語の終助詞が接続した例(7 件)も観察された。

- (6) kulehta な.
「そうだな.」
(7) nahako <人名> hyengnim huynsayk ね.
「私と、〇〇兄さん、白色ね.」

(6)は日本語終助詞「な」、(7)は「ね」が接続したものである。その他に、上記の(3)のように「よ」が接続した例や「か」「よね」もみられた。

伊藤(1989: 57)の言及のように、話者の出身地によってはもっと多様な日本語終助詞が接続する可能性がある。

3.4 その他：形態素境界における CS

その他に、日本語と朝鮮語両言語が膠着語であるために、起こるような CS もみられた。

- (8) HP hayss たら、逆に回復 hayse しつつ、バーバリアン召喚でそのまわりにいる。
「HP したら、逆に回復しつつ、しつつ、バーバリアン召喚でそのまわりにいる.」
(9) チャレンジボード nun か lile kasseyo.

「チャレンジボードは、借りに行きました。」

(8)の「hayss たら」は、「haysssta」と「一たら」が接続したものとみられるが、朝鮮語終結語尾「ta」と日本語の仮定・条件マーカー「一たら」の「た」は、音声的違いがさほどないものである²。そのためか、重複する「ta」「た」のうち、一つが脱落した形でCSが起こっているものと考えられる。

また、(9)の「かlile」は、「かりる(借りる)」に「-le」が接続したものとと思われるが、「かりる」の第一音節(モーラ)の「ka」は長母音のように発せられており、つまり「ka:lile」³のように実現している。日本語の動詞「借りる」に相当する朝鮮語の動詞は「pil.li.ta」⁴であるが、これを(9)の「かlile」と同じ意味になるよう活用させると、「pil.li.le」になる。実際の音声で「ka」が長母音のように発せられたのは、日本語から朝鮮語へのCSが起こる段階に、話者の迷いと解釈できるだろうか。

4. おわりに

本稿では、日朝バイリンガルである朝鮮学校の児童・生徒たちの発話データからみえるCSのタイプや特徴について述べた。データからは、他の日朝バイリンガルの発話でもみられる「hata形CS」や、「朝鮮語文の文末に日本語終助詞が接続するタイプ」のほか、形態素境界におけるCSなどもみられた。

朝鮮学校の児童・生徒たちの発話にみられるCSは、他のバイリンガルにもみられるような例(日英バイリンガルによる日本語終助詞接続タイプ)もあれば、みられないような例(hata形CS、形態素境界におけるCS)もあった。しかしそれは、言語タイプの違いによるものと考えられ、解釈の際は言語類型論的考察も必要とされよう。

謝辞 本研究は、2014年大韓民国教育部および韓国学中央研究院(韓国学振興事業団)から東京大学韓国学研究中心が受けた「海外韓国学中核大学育成事業」の支援を受け遂行した研究である(AKS-2014-OLU-2250002)。This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies (AKS-2014-OLU-2250002)。

参考文献

- 伊藤英人(1989). 在日朝鮮人によって使用される朝鮮語の研究の必要性について 日本の多言語使用についての実態調査
東京外国語大学井上史雄研究室
- 金智英(2006). 在日コリアン一世の言語運用の一実態 真田信治(監)・任榮哲(編) 韓国人による日本社会言語学研究 おうふう pp. 168-182.
- 金美善(2003). 混じり合うことば—在日コリアン一世の混用コードについて 月刊言語, 2003年6月号 大修館書店 pp. 46-52.
- 郭銀心(2006). 韓国の帰国子女の言語生活—日本語と韓国語間のコード・スイッチングを中心に— 真田信治(監)・任榮哲(編) 韓国人による日本社会言語学研究 おうふう pp. 201-222.
- 朴浩烈(2007). 在日朝鮮語の研究—言語分析・社会言語学的考察への試み— 韓国語學年報, 3, 93-124.
- 朴良順(2006). 日本語・韓国語間のバイリンガリズムとコード・スイッチング 真田信治(監)・任榮哲(編) 韓国人による日本社会言語学研究 おうふう pp. 183-200.
- 吉田さち(2005). 二言語の能力とコード・スイッチング—韓国系民族学校の高校生を対象として— 社会言語科学, 8(1), 43-56.

² ここでは、「hayss」に「一たら」が接続したものと処理した。

³ 便宜上、このように表記する。

⁴ 「」は、音節境界を示している。